

修道女

仏文科の学生であった頃、授業中の私が楽しんでいたのは、講義の本題よりはその合間に語られる「道草」の方だった。

「修道女の話」は、その中でもとりわけ心に残ったエピソードで、当時、戦後のフランス小説を数多く訳しておられて、仏文科の学生でその名を知らぬ者のなかったS…先生の、これはご自身の苦心談である。そのあらましは、……

修道女

あるとき、翻訳しているフランス小説の中に、「修道女のような雲」という一句が出てきた。そのように訳してはみたものの、どうも納得がいかない。それはそうだ。たしかに修道女は清らかな哀感を漂わせ、雲もまた汚れなき哀愁を誘う。その点でこの二つは似ていないことはないが、しかし、「空に修道女のような雲が浮かんでいる。」となると、どうだろう。ふさわしいどころか、怪奇的ですらある。

その後、先生はフランスへ渡られ、そしてある日、街のお菓子屋のショーケースを見て、「あっ！」と叫んで棒立ちになった。並んでいるお菓子の一種に「修道女」という名前がついていたのである。

このお菓子のような雲ということであれば、まさにびったりの表現だ、と先生は思ったそうだが、それが具体的にはどういう形をしたものなのかということ、はたして先生が話されたかどうか、私には記憶がない。詳しい説明があったのかもしれないが、私は聞いていなかった。私はそのとき聴覚機能を完全に停止して、窓の外に眼を向け、その空に現実には浮かんでいる雲を眺めながら、あの雲に似ているという「修道女」というフランス菓子を、いつの日か是非ともこの眼で見に行かなくてはならない、と考えていたのであった。いささか大仰な言い方をすれば、私はそのとき初め

修道女

て、はつきりとフランス留学を心に誓ったのである。

それから数年後、フランスに着いた私が何はさておき「修道女」のことを考えていたかと言えば、そうではない。それどころか、このことは殆ど念頭を去っていた。人並みに人生を泳ぎ渡っているうちには、あれやこれやの大波小波を身に受けて、それはいずれも人に語るほどのことではない、本当に人並みのことながら、それでも当人としては常に心にいとま無く、水面をあつぷ、あつぷしているうちに、かつて大空に思い描いたお菓子の雲は、音もなく彼方へ去ったか、あるいは涙の雨とこぼれ落ち、水中にまぎれ込んでしまったようであった。

実際に「修道女」を見たのは、フランスに着いて何ヵ月か経ったある日のことである。人気ない裏通りの小さなお菓子屋のショーケースの中だった。日本の地方を旅した時などにも、古びた店構えの、照明も暗いガラス棚に、おそらくはその地方独特の菓子なのであろう、どれもたいして変わり映えしないながら、しかし良く見れば少しずつ違いがあるのが、ほんの少量ずつ並べられているのを見ることがあるが、この本場のフランス菓子屋は、日本によくある華やかなケーキ屋さんとは違って、むしろそんな鄙びた和菓子屋を思わせた。

値段が書いてある小さな札の上の方に、活字に慣れた眼にはちよつと判読に手間どるような装飾の多い字体で何か書いてあって、それを眼を細めてじつと見つめると、Religieuse「修道女」と読めた。

「そうか。これなのか。これならば、本当に雲の喩えにぴったりだ」
私もまたS：先生と同じように、そのお菓子に見入りながら、考えた。

では、その「修道女」とはどんなお菓子なのかと言えば、早い話がシュー・クリームである。ただそのシュー、日本語に直すとキャベツの真中が一段と高く盛り上っていて、横から見ると丸いつばのついた帽子のような形をしている。そして、その中央の小山の周囲に、白い生クリームのような飾りが、チョン、チョン、チョンと、まるで小花を連ねたようにしているのである。

シュー・クリームと言えば、これはもう知らぬ人もないフランスで最も平凡なお菓子だが、その仕上りに少々趣向を凝らして「修道女」と呼ぶのは、大福餅をちよつと工夫して乙女餅などと言うのと同じことであろうか。

しかし、なぜ「修道女」なのだろう。改めて考えると、かつて修道女に似ている雲というのがピンと来なかったのと同じように、このお菓子と、私達の頭にあるあの修道女とは結びつかないように思われる。

修道女

大空に浮かぶ雲ならば、それこそ変幻きわまりないのが身上だから、時には修道女みたいな形になることだって、絶対には言い切れない。日本にも入道雲というのがあるではないか。入道というのは坊さんのこと、修道女というのは尼さんのことだから、これまたびつたりだ。「東男に京女」じゃないけれど、東洋の坊さん雲に西洋の尼さん雲なんて、ハッ、ハッ、おもしろい、おもしろい……、と笑ってごまかすわけにもいかないから、真面目に頭をひねって考える。お菓子の「修道女」はどうして「修道女」なのか。なぜだか、元の木阿弥という気がしきりとして、私は、思いもかけずめぐり逢った「修道女」を買いもとめせず、そこを立ち去ったのだった。

「修道女」というお菓子の名前の由来を知ったのは、それからさらに数カ月後、あるフランス人の家に夕食に招かれて行った時のことだった。

その食卓での、いわば座興に、私は、日本で私の先生の一人であったあるフランス文学者が、翻訳中に「修道女のような雲」という一句に出くわして、これを訳しあぐねたという、件のエピソードを語ったのだった。

この手の話は知的で上品でいながら、ユーモラスで、しかもいささかエキゾチックでもあるので、パーティや会食ではなかなかの効果をもたらす。

わけてもこの時はうまくいった方で、私が終りに、

「……というのは、彼はそれがお菓子の名前だということを知らなかったものですか」

とつけ加えると、人々は感に堪えたように深く頷いた。客の一人が、

「そうねえ。フランス人が読めば、それがお菓子のことを言っているのだということは一目瞭然なんですけれどねえ……で、何てお話しになりましたの、その有名な先生は？」

「ですから仕方なく、〈修道女のような雲〉と……」

答えて、自分でもおかしいと思った。というのも、「修道女のような雲」という一句は、日本語に訳した時にこそ奇妙なのだけれども、それをフランス人に伝えようとしても一度フランス語に直すと、もとの表現に戻ってしまっただけで少しくおかしなくなってしまうのである。この矛盾に気がついて、私は心ないさかさか進退きわまる思いをした。しかし、相手は素早くそれを察したかのように、

「つまりお菓子のことでなく、人間のことになってしまったのね」

と、助け舟を出してくれた。そして、なおもあり余る善意をもてあますかのように、

修道女

「修道女というのは日本語では何て言うのかしら？」

どうでも良いことを、蜜のように甘い声でたずねたのである。

「シュードージョ」

私は重たしく発音し、なぜか心が沈むのを覚えた。そのとき、

「それじゃあ、お菓子のお修道女の方は？」

その家の主婦が頓狂な声を上げた。

「やっぱり：、シュードージョ、かな」

「あーら、同じなのねえ。それならそう訳したって、別にまずいことないんじゃない？」

とたんに食卓は議論の渦にまきこまれた。お菓子そのものがないのだから、訳すことは不可能だと言う人。あっても無くても、書いてあれば何とか訳さないわけにはいかないじゃないか、と言う人。いっそ、そのまま「ルリジューズ」としたら良いと言う人。そんなことができるわけはない、日本語は表記も発音も違うのだから、という人。「それに、それじゃあ修道女っていうお菓子の持っている感じが伝わらないんじゃないかな。だって、あのお菓子は人間の修道女とまったく無関係というわけでもないんだから」

その意見に心惹かれて、私は座が少し静まるのを待ってたずねた、

「あのお菓子は、どうして修道女という名前がついているのですか」

「それはね、あのお菓子が修道女の冠りものの形をしているからなんですよ。ほら、修道女は頭をヴェールで包んでいるでしょう。あのお菓子はそのヴェールみたいだということなの」

白い小花のついたヴェールをまとった、そんな華やかな修道女など、私はそれまで一度も見ただけはなかった。が、ひよっとして、あれがそうではあるまいかと、一瞬の後に心に浮かんできたのは、フランスのどの街角の写真屋にも必ず飾ってある初聖体の少女の晴れ姿である。

カトリックの子弟が十二・三歳になると、教会で初聖体の儀式を受ける。その本当の意味は門外漢の私には良く分らないけれども、裾の長い純白の衣と小花を散らしたヴェールに包まれた少女達は言いようもなく清らかな愛らしかったから、子どもの成長がある段階に達したところで、きれいに着飾らせて喜ぶというのは、西も東も変わるところのない親ごころかと、日本の七五三と思ひ合わせて感心したものであった。だが、いかに華やかでも、初聖体が宗教的儀式である以上、あの衣装もまた宗教的なもの、つまりは修道服なのではないだろうか。

修道女

だとすれば、それとよく似たウェディング・ドレスは何なのだろう。もしかすると、あれもまた修道服の一種ではなかったか。教会で行われる人生最大の儀式のために、花嫁は、黒と並んで最も宗教的な色である純白に身を包んでいるのではあるまいか。そう言えば、修道女のことを「キリストの花嫁」と言う。

女は修道女として結婚生活に入るのだろうか、と私は思い、そう考えてみれば、それもまた思い当るところのなくもない気がして、ひとひらの雲のようにはかなくも美しいお菓子の上に、しばし心をさまよわせたものである。

(初出「学燈」一九八六年二月号)